

月報

国立国会図書館



音の歴史を残す

この人を知る 大久保利謙

2011.9
No. 606

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
03(3506)3301(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付 月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00 後日複写受付 月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30 オンライン複写受付 月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30
資料請求時間	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 資料提供部 利用者サービス企画課 03(3581)2331 内線26111

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
利用案内 0774(98)1212(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付 月～土曜日 10:00～17:00
資料請求時間	月～土曜日 10:00～17:15	後日複写受付 月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	オンライン複写受付 月～土曜日 10:00～17:00

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。		
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間 火～土曜日 9:30～17:00	資料請求時間	火～土曜日 9:30～16:30	
複写サービス時間	即日複写受付 火～日曜日 10:00～16:00	後日複写受付	火～日曜日 10:00～16:30	
	複写製品引渡し 火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30			

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

02 撫順図書館報 炭鉱都市の図書館

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 音の歴史を残す

04 SP盤のデジタル化 利用と保存の両立をめざして / 藤本 草

07 歴史的音源の提供

10 国立国会図書館の音楽資料

17 この人を知る 大久保利謙

20 関東大震災と上野図書館

23 言葉のエッセイ 第8回 外国語を日本語でどう表記するか

24 館内サービスが変わります

16 館内スコープ

君の名は

28 本屋にない本

○『ムカサリ絵馬』展 描かれた死者の結婚式』

○『窓と扉 窓と扉の向こうにある平和と幸福のために』

30 NDL NEWS

○第9回納本制度審議会代償金部会

○ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本
研究所との東日本大震災に関するデジタルアーカイ
ブ共同事業協定

○おもな人事

31 お知らせ

○国際子ども図書館展示会「ヴィクトリア朝の子ども
の本：イングラムコレクションより」

○『国立国会図書館資料デジタル化の手引 2011年版』
を刊行しました

○新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

撫順圖書館報

炭鉱都市の図書館

山本 直樹

撫順図書館は、旧満洲（中国東北部）の炭鉱都市・撫順に設置されていた図書館である。戦前の満洲には各地に図書館が存在し、いずれも南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）がその運営に関わっていた。その中でも撫順図書館は比較的小規模で、1910年、満鉄撫順炭礦職員倶楽部内に設立された図書室に由来する。この図書室内に沿線住民が利用できる撫順簡易図書館が設置され、両者が統合されて撫順図書館となった。その間、新たに専用の建物が建築され、分館の炭礦図書室とあわせて二館体制となり、満鉄附属地の行政権が「満洲国」へ移譲されたのに伴って図書館も市に移管され、最終的には奉天省撫順市立図書館となった。

満洲各地に図書館が作られて間もない頃、満鉄は図書館員の養成に力を入れていた。その中の一人、大佐三四五（1899-1967）は、米国に留学し最新の図書館学を学んだのち、1930年、撫順図書館長に着任した。満洲の地で先進的な図書館運営を行おうという熱意に満ちていた大佐は、赴任して間もなくこの『撫順圖書館報』（以下、館報）の刊行を開始した。館報には新着図書案内、イベント情報、各種統計などのほか、職員による様々なコラムが掲載され、大佐自身も「図書の外装紙に就て」（創刊号 写真1）「カード目録の話」（第6巻第3号 1936年3月）などを執筆している。

撫順図書館では、図書館資料の館外貸出は有料であったものの、「積極貸出」と称して利用者へ資料の配達を行っていた。さらに1936年には「閲覧予約」を開始し、満鉄の路線網を活かし、他の図書館との相互貸借も実施するようになった。こうした図書館サービスには書誌や目録の整

備が不可欠であり、第7巻第3号の表紙（写真2）には撫順図書館独自の分類表が掲載され、蔵書の整理に工夫がなされていたことがうかがえる。

大佐を継いで館長に赴任した大森志郎（1905-1992）は日本史学者で、戦後『魏志倭人伝の研究』（宝文館 1955）を著した。その後館長となった渡邊三三（^{さんぞう}生没年不明）は、業務のかたわら撫順近郊の高句麗山城の発掘を手がけた考古史家であった。渡邊らによって館内に郷土資料室が設置され、館報にも撫順の歴史に関する連載記事が掲載されている。また館のイベントにも、「撫順出土品時代別展覧会」（写真6）、「高句麗墳墓壁画展」など郷土史関連のものが散見される。

このように炭鉱都市での文化的な取組みが綴られた館報は、後に満洲国政府の方針により、論文やコラムの部分が満洲図書館協会発行の紀要『學叢』へ統合され、第125号以降は、新着図書目録と利用統計で構成された無機質な内容となる。国立国会図書館が所蔵する最後の号第159号（写真3）は、物資不足のためか、紙質が悪く簡素なものである。

大佐をはじめとする「大陸の図書館員」とちとその取組みは、戦後の日本の図書館界に大きな影響を与え、牽引していくこととなったが、満洲国における公共図書館の実態は、まだ明らかになっていないことが多い。

なお、満洲の図書館の刊行物には、このほか大連図書館報（第101号までは満鉄各図書館報）である『書香』、奉天図書館の『収書月報』、^{ヘルシン}ハルビン図書館の^{ほくそう}『北窓』などがある。これらは復刻版が出ており、比較的手に取りやすい。

（やまもと なおき 資料提供部雑誌課）



写真1



写真2



写真3



写真4

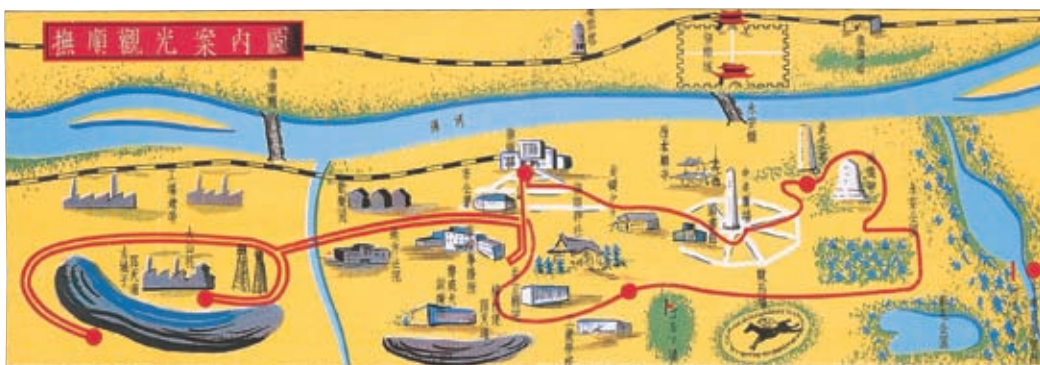


写真5



写真6

撫順圖書館報 撫順圖書館

第1巻第1号(1930年9月)～第169号(1944年5月)

<請求記号 雑14-82>

※国立国会図書館の所蔵は第159号(1943年12月)まで。

館内限定でデジタル画像を閲覧可能。

※財団法人東洋文庫(東京都文京区)に第169号まで所蔵あり。

写真1 館報 第1巻第1号(1930年9月) 表紙 館の外観が描かれている。

写真2 館報 第7巻第3号(1936年3月) 表紙 外観写真の下に掲載されている分類表は、撫順図書館独自のものである。

写真3 館報 第159号(1943年12月)

写真4 撫順図書館のスタンプ。満洲で日本図書館協会の全国図書館大会が開催されたことを記念して作られ、蔵書印としても使われた。館報 第86号(1937年11月) p.4

写真5 当時の観光案内図にも撫順図書館が掲載されている(中央から少し右、西本願寺の下)。「炭都撫順案内」(奉天交通 1939) 1枚 26.5×38cm(折りたたみ17×9.6cm)部分
※近代デジタルライブラリーで閲覧可能

写真6 「撫順出土品時代別展覧会」の会場。大連図書館編・刊『書香』第90号(1936年12月) p.2 <請求記号 雑14-80> 渡邊は館報 第104号(1939年5月)に「清朝発祥の地・二道河旧老城発見」、第113号(1940年2月)に「撫順の古瓦に就て」等を執筆した。

参考文献

- 村上美代治著・刊『満鉄図書館史』 2010
- 岡村敬二著『「満洲国」資料集積機関概観』 不二出版 2004
- 加藤一夫、河田いこひ、東條文規著『日本の植民地図書館 アジアにおける日本近代図書館史』 社会評論社 2005
- 荻谷純一「満鉄図書館と大佐三四五」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』(5) 2005.2 pp.88-99 (<http://atlantic2.gsscc.nihon-u.ac.jp/kiyou/pdf05/5-88-99-tomotani.pdf>)
- 「特集 満洲の図書館とライブラリアン」『朱夏』(せらび書房)(12) 1999 pp.4-68
- 「特集 満鉄図書館」『彷彿月刊』(弘隆社) 4(6) 1988.5 pp.2-18

SP 盤のデジタル化 利用と保存の両立をめざして

公益財団法人日本伝統文化振興財団理事長 藤本 草

1 歴史的音盤アーカイブ推進協議会 (HiRAC: Historical Records Archive Promotion Conference)

歴史的音盤アーカイブ推進協議会（以下、HiRAC）は、日本放送協会（NHK）、一般社団法人日本音楽著作権協会（JASRAC）、社団法人日本芸能実演家団体協議会（芸団協）、特定非営利活動法人映像産業振興機構（VIPO）、一般社団法人日本レコード協会（RIAJ）、公益財団法人日本伝統文化振興財団の6団体で構成された任意団体として平成19年4月27日に発足しました。

HiRACの事業目的は、歴史的・文化的資産である初期のレコード（SP盤）および原盤に記録された音源の劣化、散逸等による喪失を防ぐため、これら原盤の音源をデジタル保存することにあります。

日本における最初の録音は、明治36（1903）年に英国グラモフォン社（現EMI）の技師ガイズバーグ（Gaisberg, Frederick William 1873-1951）が日本に「出張録音」して吹き込まれたSP盤全273面の音源といわれています。このSP盤には、雅楽、能狂言、義太夫、長唄、常磐津、清元、小唄、落語などに加えて、当時の世相を映す流行歌、声色など様々な音源が収められています¹。また日本人の最古の演奏録音は、川上音二郎一座が渡欧中の1900年に同じ英国グラモフォン社に吹き込んだ長唄、詩吟、流行歌「オッペケペー」など²

と考えられています。これらの音源原盤は、ロンドンのEMIアーカイブ部門で今日まで大切に保存されています。

日本のレコード事業は、明治43（1910）年に日本コロムビアが創立されて始まります。以後SP盤は、昭和30年代にLP、EPが登場するまで音盤の主流となりますが、ビクター、テイチク、キングなど戦前から続くレコード会社の原盤は、戦火による破壊と喪失が大きく、明治以降に設立された約50社を数えるレコード会社の多くは廃絶し来歴はもはや定かではなく、その原盤のほとんどすべては失われています。その結果、総数10万音源とも推定されるこれらの音源のうち、約半数は原盤としてレコード会社にあり、残る半分のうち一部は、SP盤として放送局、民間愛好家、全国の資料館等に現在まで所蔵され、それ以外はすでに散逸、消失してしまったとも考えられています。また、カイガラムシが分泌する天然樹脂を材料にして製造されたSP盤は、固くてもろい性質を持っています。半世紀を超える経年変化による劣化とひび割れ・欠けなどによって、吹き込まれた「音」の再生が不可能な盤は今後増える一方と想定されています。

録音・再生が可能となってからまだわずか100余年ですが、その初期に残された貴重な「音」を広く公開し得る「デジタル・アーカイブ」を推進するための機構としてHiRACは設立されました。



2 音源保存事業の意義

明治末以降の半世紀以上にわたってSP盤に吹き込まれた多彩なジャンルの音楽、演芸、演説、実況放送等の音源は、かつて時代の世相を伝える録音メディアとして重要な役割を担っていました。これらのSP盤は、「音」を通じてしか知り得ない無形の文化遺産にほかなりません。

中世日本で歌われた「梁塵秘抄」や中国の「敦煌琵琶譜」の例を待たず、現代まで伝えられ書き残されたものを見ても「音」はよみがえりません。「百聞は一見に如かず」ではなく「百見は一聞に如かず」、**「音」**の実際はどれだけ言葉で説明しても伝えることのできないものです。

また、コンピュータとネットワークの進歩は想像をはるかに超えて日に日に著しく、やがて無数につながったコンピュータを介して、世界中に遍在するあらゆる情報が瞬時に得られる時代が到来しようとしています。このように、人類が経験したことのない未曾有の情報革命の進行と歩を合わせ、書籍、文献、絵画、写真、映像などあらゆる分野で築かれた文化遺産のデジタル化が全世界で急速に進められています。こうしたデジタル情報革命を通じて人々が知恵と知識を共有し、いつでもどこからでも情報とエンターテインメントを享受できる時代には、言い換えれば、「デジタル化」されていない情報は存在しないことと同様となります。SP盤に吹き込まれた**「音」**は、約1世紀

前から半世紀にわたる日本の音の生きた記録です。そのすべてを今後将来にわたる日本の音文化の資料とすることこそが、本事業の意義と考えています。

3 国立国会図書館への納入の経緯

こうした経緯を経て設立されたHiRACでしたが、SP盤音源のデジタル・アーカイブは参加6団体にとって未経験の部分の多い領域でした。そこでまず、HiRAC内にアーカイブに関する収録技術と音声フォーマット等を検討する技術検討部会とアーカイブの利活用に関する運用ルール策定等を検討する運用検討部会を設置しました。運用検討部会ではアーカイブ対象音源への「管理コード」の付与に始まり、音源リストの提出、著作権情報の調査、アーカイブ作業の発注を音源所有者に対して依頼するとともに、JASRACでの著作権情報調査、メタデータ必要項目の構築と、それに基づくデータベースの作成を順次行いました。また技術検討部会では、SP盤とは溝と山が反対の関係にあり回転方向も逆の金属原盤の再生方法——山になっている凸にまたがって進むレコード針の開

1 「全集日本吹込み事始 一九〇三年ガイズバーク・レコーディングス」(東芝EMI 2001)、としてCD化されている。そのダイジェスト版として、「日本吹込み事始 一九〇三年ガイズバーク・レコーディングス」(東芝EMI 2000)〈請求記号 YMC-306-24-15〉もある。

2 「甦るオッペケペー 1900年パリ万博の川上一座」(東芝EMI 1997)〈請求記号 YMC-206-21-2〉としてCD化されている。

発、無接触のレーザー光で溝を読むプレーヤーの検証、デジタル・フォーマットの決定、初期には一定でなかった回転数の調査等を行いました。

このように、初年度には音源収録方法や技術関連の事前調査・検討を行い、翌年の平成20年度からメタデータ整備と音源アーカイブ化を開始、平成22年度からアーカイブの公開と利活用の準備、検討に入り、平成23年度からの公開を目指すこととしましたが、実際には公開についての確定プランはありませんでした。

HiRAC設立2年目を迎えた平成20年に、書籍のデジタル・アーカイブ推進と歩を合わせ、歴史的音源の将来の公開に向けて国立国会図書館が取り組むという朗報が届きました。これは、参加団体の中核となって公開事業の推進に当たっていたRIAJの一念に、国立国会図書館が応えてくださったことによるものと考えています。

現状、SP盤の保存と公開を展開する主要な施設には、北海道新冠町の「レ・コード館」、金沢市の「金沢蓄音器館」、東京都千代田区の「昭和館」等がありますが、これらの機関が所蔵する原盤はいずれも全国の機関、個人からの寄贈によるもので、SP盤に残された音源の全貌を知り得るものではありません。また、そこを訪れた人にもみ聴く機会が与えられ、残念ながら広く一般への公開とはいいがたいものとなっています。HiRACが目指すSP盤のデジタル・アーカイブ化の将来は公開す

ることにあり、その方法として、国立国会図書館での提供はまさにベストと思える選択肢でした。

平成21年度から国立国会図書館への音源の納入が始まり、平成23年5月31日には公開がスタートしました。これらSP盤の再生音は、現代に暮らす我々に生き活きとした当時のままの音文化を描き出す、時代を証言する貴重な資料です。

日本における録音の歴史の全貌が初めて明らかとなるこのアーカイブの完成は、日本の音文化の確かな証言者であるSPレコード音声の復刻を通じた、日本の音楽資料・音声情報の貴重なインフラストラクチャーとなることと確信しています。

(ふじもと そう)

藤本 草 氏

1950年、東京都出身。
1976年4月、日本ビクター株式会社に入社。音楽制作部門にあたるビクターエンタテインメント株式会社で、音楽・映像プロデューサーとして、日本の古典音楽・民俗芸能、世界の民族音楽、欧米のクラシック音楽を専門分野とし、千タイトルを超える作品を制作。

現在、財団法人全国税理士共栄会文化財団理事、財団法人合唱音楽振興会理事、財団法人伝統文化活性化国民協会参与、特定非営利活動法人日本尺八協会理事、東京都文化発信プロジェクト委員、歴史的音盤アーカイブ推進協議会副代表幹事。その他、東京邦楽コンクール審査委員長、久留米市主催「賢順記念全国箏曲コンクール」審査委員等を歴任。





歴史的音源の提供



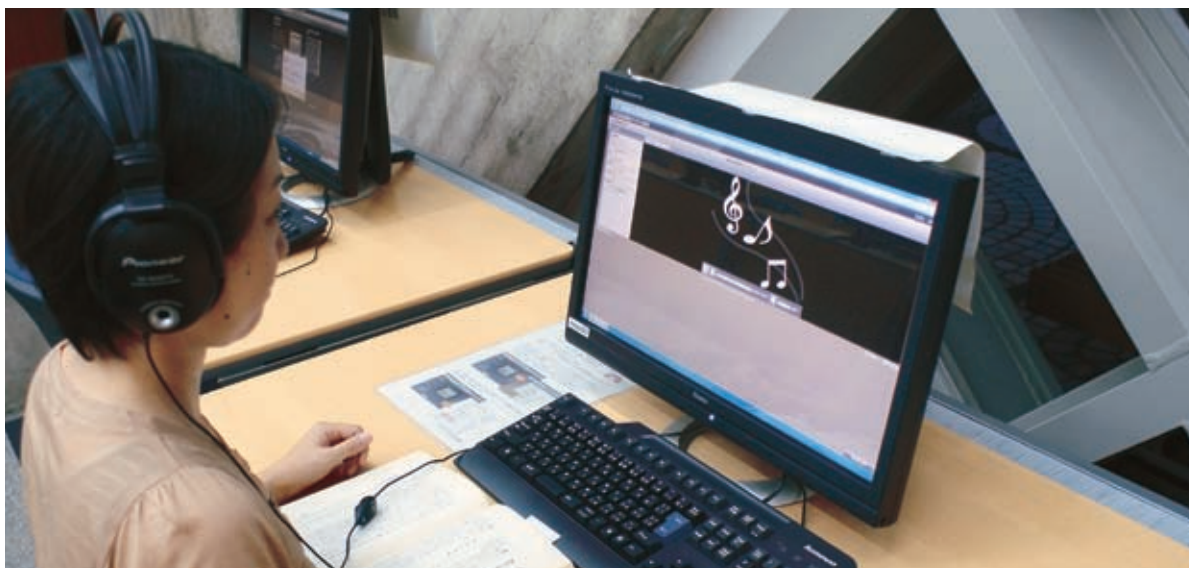
<http://dl.ndl.go.jp/#music> 国立国会図書館ホームページ＞電子図書館＞歴史的音源

国立国会図書館は、SP盤および原盤等の音源のデジタルアーカイブを提供するにあたり、利用や契約の条件を歴史的音盤アーカイブ推進協議会（以下、HiRAC）と協議してきました。その結果、広く国民に公開することを目的として、図書館資料購入費に予算を計上し、平成21年度から4か年度計画で、HiRACがデジタル化した音源が納入される運びとなりました。平成24年度末までに約5万点が納品される予定です。

納品される音源のデータ形式やメタデータ（音源に関するデータ）の項目についてもHiRACと調整を行い、例えば、タイトルや収録時間、著

作権情報といったメタデータ項目について、どのような項目を設けるべきか詳細な検討を行いました。また、音源を保存・提供するためのシステムを開発し、公開に向けた準備を進めてきました。

そして平成23年5月31日に、提供の準備が整ったデータ約2,500点を「歴史的音源」¹として公開しました。6月27日にはさらに約1万8千点を公開しています。このうち、著作権および著作隣接権の保護期間満了が確認された約500点は、インターネット上でも提供しています。また、著作権および著作隣接権の保護期間内の音源を含めたすべての音源について、現在は国立国会図書館の施設内



でのみ提供していますが、公立図書館でも利用できるように、配信の試行提供準備を進めています。

HiRACから納品された歴史的音源のデータは、非圧縮のWAV²ファイル形式です。そのまま提供するにはデータ量が大き過ぎるため、音声はMP3³ファイル形式に変換・圧縮した上でFLV⁴ファイルに格納し、ストリーミング⁵方式で提供しています。一定の環境⁶を満たせば、特別な再生ソフトウェア等を必要とせずに、音量の調整や指定位置からの再生などを画面上で行えるようにしています。

歴史的音源には、落語、長唄、管弦楽、歌劇、清元、浪花節、歌謡曲、講演、ジャズなど多様な内容が含まれており、公開以来、「想像以上により音で驚いた」「貴重なアーカイブですばらしい取組み」「今後の追加公開が待ち遠しい」などの

反響をいただいています。期待の声にお応えするために、今後納入される音源も、準備が整ったものから公開を着々と進めていきます。貴重な音源の数々をぜひご利用ください。

(関西館電子図書館課)

1 HiRACの事業と区別し、「デジタル化した音源」であることを明確にするために、「歴史的音盤」ではなく「歴史的音源」としている。

2 RIFF Waveform Audio Format : Microsoft社とIBM社が開発したWindowsの標準音声ファイル形式。通常、非圧縮音声を格納するため、ファイルサイズは大きくなる。

3 MPEG-1 Audio Layer-3 : 国際標準規格 (ISO/IEC 11172-3) の音声圧縮形式。人の知覚しがたい部分の音を取り除くことでデータ量を圧縮している。

4 Flash Video : Macromedia社 (現 Adobe Systems社) が開発した動画ファイル形式。Flash Playerを組み込んだWebブラウザだけで再生が可能で、ストリーミング方式の配信で広く使用されている。

5 主にマルチメディアコンテンツを視聴する際に、データを受信しながら再生を行うことで、ファイルのダウンロードの完了を待たずとも視聴が可能な方式。

6 次の環境で動作を確認している。OS : Windows、ブラウザ : Internet Explorer 7および8・Firefox 3.6・Safari 5・Google Chrome 6、歴史的音源の再生 : Adobe Flash Player 10。



歴史的音源のアーカイブから

『独唱 乾杯の歌』（コロムビア 1938）

作曲：ヴェルディ 作詞・歌：三浦環

ヴェルディのオペラ『椿姫』第1幕のアリア。訳詞は三浦自身による。

三浦環（1884-1946）は、日本人として初めて国際的に活躍したオペラ歌手。『蝶々夫人』を世界各地で2千回以上演じ、作曲者プッチーニが絶賛したことで知られる。歴史的音源のアーカイブでは、平成23年8月末現在、三浦の歌35点を収録しており、インターネットで聴くことのできる『乾杯の歌』などのほか、館内限定で『蝶々夫人』の『晴れた日の』『操に死ぬるは』などがある。メトロポリタン歌劇場でテナー歌手カルーソー（Caruso, Enrico 1873-1921）と共演したとき、「美しい声は何を召上って出すのですか」と訊かれ、「私の声は卵から出ます」、生卵を幕間に飲むと答えて驚かせたことが、自伝『お蝶夫人』（右文社 1947 日本図書センターから1997年に復刊）に書かれている。



三浦環 『三浦環 お蝶夫人』（日本図書センター 1997）口絵

『普通選挙について』（コロムビア 1928）（ニッポノフォン 1928）

演説：尾崎行雄

尾崎行雄（1858-1954）は、政治家。号は号堂。新聞記者を経て、明治23（1890）年、第1回総選挙に当選し、昭和27（1952）年総選挙まで連続25回当選。大正元（1912）年の第1次護憲運動では犬養毅とともにその先頭に立って桂首相を追及し、「憲政の神様」と呼ばれる。戦後、衆議院名誉議員となり、没後、彼を記念して国会の脇に「尾崎記念館」が建てられた（現・憲政記念館）。

この演説は、昭和3（1928）年1月に衆議院が解散され、2月20日に普通選挙法による最初の総選挙が行われたことを受けて、日本放送協会の依頼により放送されたもので、議会の解散、選挙民に求められる心構えについて語る。演説の内容は『尾崎号堂全集 第7巻』に「無名の解散と投票の仕方」として収録されている（pp.422-427）。

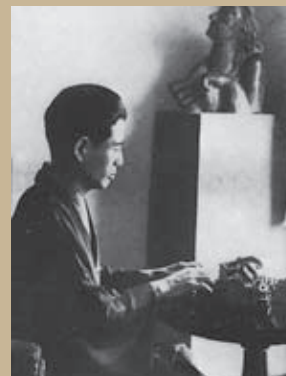


尾崎行雄（電子展示会「近代日本人の肖像」から）
<http://www.ndl.go.jp/portrait/>

『春の海』（ビクター 1930 ほか） 作曲・箏：宮城道雄

宮城道雄（1894-1956）は、箏曲家、作曲家。幼少期に失明、2代目中島検校に師事し、生田流箏曲を学ぶ。十七絃琴の考案など楽器の改良にも尽力した。

『春の海』は、昭和5（1930）年の歌会始の勅題「海辺の巖」にちなんで作曲された。平成23年8月末現在、「歴史的音源」アーカイブには、宮城自身の演奏によるいくつかのバージョンがある。インターネット上では、吉田晴風（1891-1950）の尺八との二重奏（ビクター 1930）を聴くことができる。館内限定のものでは、フランスのバイオリニスト、ルネ・シュメー（Chemet, Renée 1888-?）との共演（ビクター 1932）がある。この盤は1932年に日米仏で発売され、『春の海』を一躍有名にした。宮城は随筆集『雨の念仏』（三笠書房 1935 日本図書センターから2001年に復刊）で「言葉こそ通じないが、シュメーと私の気分がぴつたり一致してゐた。」と書いている。



宮城道雄（電子展示会「近代日本人の肖像」から）

国立国会図書館の音楽資料

音楽とその文化の歴史は、レコード・DVDなどの録音・映像資料、楽譜、演奏会のプログラムなど、様々な資料によって知ることができます。これら音楽に関する資料を図書館では「音楽資料」と呼んでいます¹。



音楽・映像資料室（東京本館）

日本の様々な機関における音楽資料

音楽資料を専門に取り扱う国内の機関としては、音楽大学図書館のほか、劇場や文化施設の資料室、音楽産業の企業図書室など、数十機関が存在します²。これらの機関は、所属する組織の性格などにより、それぞれが特色をもったコレクションを構築しています。また、特定のジャンルや時代の音楽を専門とする資料館・博物館等もあります。例えば、明治学院大学図書館附属日本近代音楽館³は、明治以降の日本の洋楽に関する資料（作

曲家の自筆譜を含む楽譜・演奏会のプログラム・関係文書等）を多数所蔵しています。戦前・戦中のレコードは、昭和館⁴で多く所蔵しています。演奏団体、放送局などでも、それぞれに関わる記録や音楽資料を所蔵していることがあります。

各機関はそれぞれ所蔵目録等を作成し、資料を管理していますが、機関の壁を越えて、日本国内のどこに何があるかという所在情報を横断的に検索するような仕組みはまだ十分にできていません⁵。しかし、貴重な音楽資料が調査研究のため



に将来にわたって活用されることを目的として、各機関の音楽資料の所在情報を互いに公開し、資料の散逸を防ぐ取組みが始まっています。

平成23年5月に文化庁と国立国会図書館との間で、歴史的・文化的価値のある資料を適切に収集・保存し、活用していくため、「我が国の貴重な資料の次世代への確実な継承に関する協定」が結ばれました⁶。この協定には、音楽資料についても、過去に日本で出版された楽譜等の所在情報データベースを作成するために連携・協力するとの規定が盛り込まれています。すでに、日本音楽学会の「日本の音楽資料」調査委員会が、文化庁の委託を受けて所在情報の調査を実施しており、国立国会図書館も協力しています。

国立国会図書館における音楽資料

(1) 所蔵資料とその利用方法

国立国会図書館は、納本制度により録音資料、楽譜などの音楽資料を収集しています。納本制度

は国立国会図書館法に基づく制度で、日本国内で発行された刊行物を国立国会図書館に納入することを出版者等に義務づけるものです。昭和24(1949)年に楽譜、録音資料が、平成12年にCD、DVD等の電子資料が、納本制度の対象に加わりました(一部の資料は購入しており、また、個人や団体からの寄贈を受けることもあります)。

納本制度に基づいて網羅的に収集を行っているため、ジャンルなどを特定しないコレクションとなっているということが国立国会図書館と他の機関との大きな違いであり、特徴といえます。

以下、国立国会図書館の音楽資料を大きく4つに分けてご紹介します。

①録音・映像資料

昭和24年以降に納入された国内盤のSPレコード約1万5千枚、LPレコード約17万5千枚、EPレコード約10万枚およびCD約30万4千枚(平成23年3月現在)等を所蔵しています。そのほか、フィ

1 本稿では、音楽資料をその内容や形態から次のように分類する。楽器は含まないものとする。①音楽自体 a) 録音・映像資料(レコード、CD、DVD、Blu-rayなど、実際に演奏された音や場面を何らかの媒体に記録した資料) b) 楽譜 ②音楽についての資料 音楽に関するあらゆるテーマや活動に関連する資料(音楽をテーマとした図書や雑誌、歌詞集、演奏会のパンフレット、ポスターなども含む)

2 専門図書館協議会編・刊『専門情報機関総覧2009』(2009)〈請求記号 UL2-J3〉を参考にした。

3 音楽評論家の遠山一行氏により設立された遠山音楽財団附属図書館が前身。昭和62(1987)年、音楽関係者を中心とする「近代音楽館を設立する会」の運動の中で、「日本近代音楽館」として改組。平成22年、明治学院大学図書館の附属機関として再編、平成23年5月新たに開館。音楽資料約50万点を所蔵。

4 厚生労働省が所管する、昭和期の国民生活に関する資料を扱う施設。平成11年開館。3万枚以上のSPレコードを収蔵しており、ホームページ上の目録で約1万曲を検索することができる(<http://www.showakan.go.jp/>)。冊子体の目録『SPレコード60,000曲総目録』(アテネ書房 2003)〈請求記号 YM2-H1〉もある。

5 『『日本の音楽資料』のデータベース化のための調査 報告書』(日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会 2010)〈請求記号 UL581-J6〉p.6

6 協定の内容は、国立国会図書館ホームページ(<http://www.ndl.go.jp/>)〈ニュース〉>2011年5月18日 文化庁との協定の締結について(http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2011/1191577_1670.html)参照。



フィルモンレコード

フィルモン音帯という、昭和5(1930)年から15(1940)年頃に日本で開発・製作されたレコードも27点所蔵しています(上写真)⁷。また、コンサート等の演奏場面が記録された映像資料(LD、VHS、DVD、Blu-ray等)も所蔵しています⁸。これら録音・映像資料は、インターネット上の所蔵目録

NDL-OPACで「音楽録音・映像」のチェックボックスにチェックすることで検索が可能です。

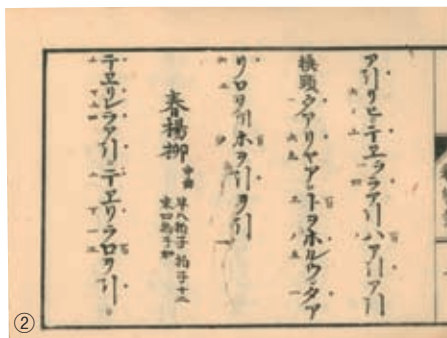
録音・映像資料は、東京本館の音楽・映像資料室でご利用になれます(ソノシートとカセットテープの一部は電子資料室)。レコード・ジャケットや解説、歌詞カードなどの付属物もあわせて利用できます。

②楽譜

国立国会図書館が所蔵している楽譜のほとんどは、冊子体で発行されているもので、タイトルや出版者名等から約2万5千件をNDL-OPACで検索することができます。一部の楽譜集等は、「リサーチ・ナビ」の目次データベースで楽曲名からも検索できます⁹。



①

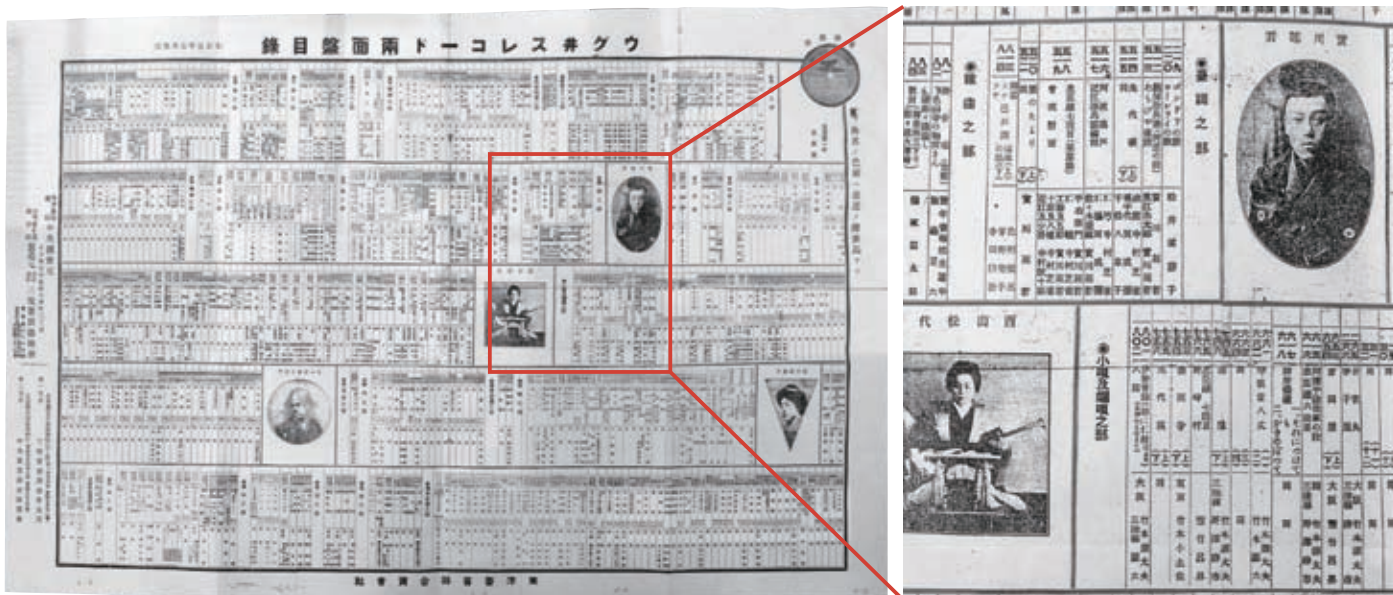


②



③

所蔵する楽譜の例 ①小林愛雄編『世界音楽全集 第10巻』(春秋社 1930) p.2 ②筆策の楽譜 東儀文礼編・刊『雅楽集』(1894) 5丁裏 ③Missale Dominicanum seu Ordinis Praedicatorum. (主のミサ書) Venice: Octavianus Scotus, 1482. 部分 ①②は「近代デジタルライブラリー」、③は電子展示会「インキュナブラ」(<http://www.ndl.go.jp/incunabula/>)で閲覧可能。



ウグキスレコード 大正5（1916）年の販売目録

明治期から昭和前期までに刊行された冊子体の楽譜は、「近代デジタルライブラリー」¹⁰に収録されており、デジタル画像で閲覧できます。

月刊など定期的に刊行される楽譜は、雑誌として扱っています¹¹。

このほか、主に江戸期以前の琴曲の指譜や尺八などの邦楽の楽譜も所蔵しており、東京本館の古典籍資料室でご利用になれます。また子ども向けの楽譜などは、国際子ども図書館で所蔵しています。

ご利用の際は、NDL-OPACで所蔵施設やサービスポイントをご確認ください。

③音楽についての資料

音楽に関する図書、雑誌、新聞のほか、大正期から平成13年くらいまでのレコード会社の販売目録を所蔵しています（上写真 所蔵範囲は会社によって異なります）。これらの販売目録によつて、日本のレコード文化の発展や、その当時の流

7 ただし、再生機器を所蔵していないため、カセットテープに媒体変換されていないものについては利用できない。フィルモン音帯については、飯島満ほか「フィルモン音帯に関する調査報告」国立文化財機構東京文化財研究所編・刊『無形文化遺産研究報告』(5) 2011.3 pp.53-76＜請求記号 Z71-S969＞参照。

8 それぞれの媒体の特徴などは、本誌591（2010年6月）号 pp.19-23「さまざまなメディア 東京本館音楽・映像資料室と

電子資料室の資料から」参照。

9 現在所蔵している楽譜集すべてを検索できるわけではない。詳細はリサーチ・ナビの楽譜の調べ方案内を参照。http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-101079.php

10 http://kindai.ndl.go.jp/

11 例として、日本放送協会編『みんなのうた』1969- ＜請求記号 Z11-2469＞ ＊当館の所蔵は1990年4/5月号から

行の曲などの音楽文化を垣間見ることができます。音楽・映像資料室で提供しており、各時代の音楽文化を知るための貴重な資料として、研究者の方々に多く利用されています。

④ 蘆原英了コレクション（特別コレクション）

バレエや音楽の著名な研究家・評論家である蘆原英了氏によるコレクションで、昭和56年にご遺族から寄贈されました。コレクションの内容は、バレエ、シャンソン、演劇、サーカス等に関する洋書等で、レコード、楽譜も含まれています¹²。東京本館の人文総合情報室で提供しており、コレクションの一部を人文総合情報室で展示しています。

(2) 録音資料を守るための取組み

音楽資料の中でも、録音資料の劣化・破損は、紙の資料よりも致命的であるといえます。録音資

料は、紙資料よりも一般に修復が難しく、音源を再生できなくなる可能性があるからです。特に天然樹脂から作られたSPは割れやすく、劣化も進んでおり、再生不能となる恐れがあります。SP、LP、EPといったアナログレコードだけでなく、CDやDVDといった光ディスクも、盤面に傷がついたり、素材や保管方法によっては記録面が化学変化して短期間に劣化することがあり、それらの損傷が原因で再生できなくなる可能性があります。また、録音資料は、再生機器がなければ、資料があっても再生することができません。このように録音資料の保存には、多くの課題があります。

国立国会図書館は、所蔵する資料を未来の世代も利用できるよう大切に保存しています。録音資料のうちレコードについては、劣化・破損を防ぐため、次のような取組みを行っています。

レコード盤のうち、SP、LPは、盤自体の重みによる反りや曲がりを防ぐために、特殊なキャビネットに収納しており、10枚単位で平置きにする等の工夫をしています。利用する際には、レコード針を使用すると、針との摩擦による摩耗が避けられず、盤面に傷をつける可能性が高くなるため、レコード針の代わりにレーザー光線で音を読み取る機材を導入しています。また、破損や汚損のリスクを抑えるため、録音資料の再生機器へのセットは職員が行います。SPは





昭和初期に製作されたSP盤のジャケット
(ビクターレコード)

一部を除き、昭和50年度から平成元年度までにカセットテープへの媒体変換を行い、SPレコード盤に代えてカセットテープを利用提供しています。また、歴史的音盤アーカイブ推進協議会（HiRAC）がデジタル化したSP盤等の音源「歴史的音源」を提供する取組みも始めました（本誌4～9ページ「SP盤のデジタル化」「歴史的音源の提供」参照）。なお、レコード等の録音・映像資料は、調査研究目的に限ってご利用いただくこととしています。

また、電子情報の長期的な保存と利用のための調査研究を進めており、その一環として、旧式録音資料（カセットテープ、オープンリール、アナログレコード等）に関する規格や技術・仕様等の調査、デジタル化の試行などを実施しています。

これらの調査の結果、旧式録音資料は、媒体が劣化しやすいだけでなく、再生機器の生産が中止されるなど再生環境が失われつつあり、利用と保存の対策を急ぎ講じるべきであることが明らかになりました。利用による劣化や破損から原資料を守り、資料を利用可能な状態に維持する手段として、保存のためのデジタル化の必要性が指摘されています。これらの調査報告書は、ホームページに掲載しています¹³。

国立国会図書館は、今後も日本の音楽文化を伝える貴重な音楽資料を保存し、利活用していただくため、国内の関係機関と連携・協力しつつ、様々な取組みを行っていきます。

（資料提供部電子資料課）

音楽資料・情報担当者セミナー

国立国会図書館は平成22年度から、音楽資料を扱う方々を対象として、より専門的な知識や技術の向上を目的とした「音楽資料・情報担当者セミナー」を開催しています。

平成23年度は「音楽資料の組織化」をテーマとして、国内外の最新の動向についての講義とグループ討論などを行いました。講義資料はホームページに掲載する予定です。

¹² 蘆原コレクションの詳細は、本誌497(2002年8月)号 p.28「葦原英了コレクション（当館の蔵書から 16）」参照。

¹³ 国立国会図書館ホームページ＞国立国会図書館について＞電子図書館事業＞電子情報の長期的な保存と利用＞電子情報の長期利用保証に関する調査研究＞平成22年度の調査研究の内容（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation_01_2010.html）参照。

君の名は

わたしの名刺には、「国立国会図書館総務部 総務課法規係」と書いてあります。その、わたしが所属する係の名前が法規係であったり、隣の課が総務部企画課で、上の階で働いている職員の所属課が調査及び立法考査局国会レファレンス課と呼ばれていたりすることは、どこで決まっているのでしょうか。

答えは、法規です。公務員の仕事は、すべて法規に規定されています。ですから、国立国会図書館の部署名や仕事内容に変更が生じたときは、法規を改正しなければなりません。そしてその法規改正に関する仕事を担当しているのが、法規係です。

この10月、国立国会図書館には「利用者サービス部」と「電子情報部」が新しく設置されます。利用者のみなさまへのより充実したサービスの提供と、電子図書館事業の一層の推進とを目指したこの組織再編により、二つの新しい部だけでなく、たくさんの課と係が名称や役割を変えます。

「現在〇〇部▲▲課××係が担当している■ ■の仕事は、再編後はどこが担当するのですか？」「新設の係の名称は、これで確定ですか？」組織再編に向けて、法規上、国立国会図書館の仕事がひとつとして漏れることのないように、また、部署の名称が担当職務を的確に表してい



るように、法規係と関連部署との協議が続きました。時には、仕事の分担をめぐって複数の部署との調整が必要な場合もあります。最後に条文としての体裁を整える作業にも、時間を要しました。

多大な労力を要する仕事でしたが、新しい組織の誕生に向けて働いた高揚感がありました。来る10月から新しい名刺を持って働く職員も、10月以前と同じ部署名で働く職員も、一丸となってより良いサービスの提供に努めて参ります。

(総務課法規係 係員)

この人を知る

大久保 利謙

歴史学者
元国立国会図書館客員調査員



『明治維新の政治過程』(大久保利謙歴史著作集 第1巻)
口絵 (吉川弘文館 1986)

■実証重視の学問的姿勢

—歴史資料への関心

大久保^{としあき}利謙(1900-1995)は、祖父の大久保利通が明治新政府の実力者、父で利通の三男利武が内務省官僚という家に生まれますが、大久保自身は日本史研究を志し、日本近代の学制史研究を手始めに、シーボルト研究をはじめとした洋学史研究、明治14年の政変に関する研究など、政治史・文化史で多くの業績を遺しました¹。

実証を重視した大久保の研究態度は、種々の編纂事業を通じた資料探索、吉野作造や尾佐竹^{たけき}猛が代表を務めた在野の研究団体明治文化研究会との関わりなどによって培われました。戦前期には、幕末以降の歴史資料を収集する公的機関はほとんどなく、資料収集といえば、所蔵者と交渉して資料を借り、写字生が筆写することを指しました。この地道な作業が大久保の研究を支え、同時に歴史資料への関心を高めたといえます。そして、大久保の歴史資料への関心は、戦前の憲政史編纂事

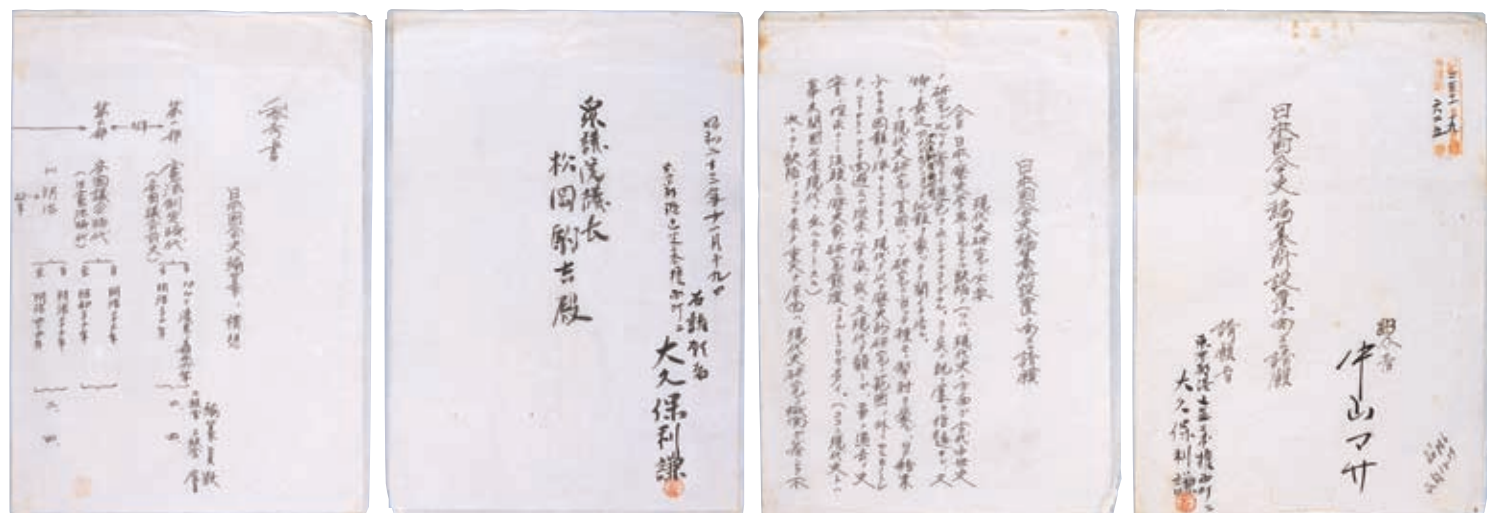
業への参加を契機に、国立国会図書館の憲政資料室など、戦後の歴史資料アーカイブ設置へとつながることとなりました。

■貴族院五十年史編纂から

「日本国会史編纂所設置ニ関スル請願」へ

帝国憲法制定50周年を記念し、昭和12(1937)年、衆議院は憲政史編纂会を、翌年には貴族院が貴族院五十年史編纂掛を設置し、憲政史編纂に乗り出します。貴族院側の編纂嘱託となった大久保は、編纂長だった尾佐竹の方針のもと、まず資料収集を優先して行いましたが、戦争により作業は中断します。

戦後、大久保は編纂再開を提案しますが、貴族院事務局を引き継いだ参議院事務局では、終戦直後という時代状況や資料収集に終始した戦前の編纂事業への不信感から、事業再開に異論もあったようです。そこで大久保は国会への請願という方法を採用します。



「日本国会史編纂所設置ニ関スル請願」本文と国会史編纂の方針を記した「参考書」（部分 東京本館憲政資料室所蔵）
 <請求記号 鈴木隆夫関係文書167>

昭和23（1948）年11月19日に提出された「日本国会史編纂所設置ニ関スル請願」²は、関東大震災や戦災、戦後の混乱によって、幕末以降の資料が焼失・散逸しているとして、「国家的立場カラ特別ノ機関ヲ設ケ」、「貴重ナル国家的史料ノ保存ノ道ヲ確立サレタイ」と述べます。また、明治以来の憲政史の解明が国の施策立案に資するとし、戦前の憲政史編纂会、貴族院五十年史編纂掛を例に、「特別ノ機関」による編纂の必要性を主張しています。

■歴史資料のアーカイブ創設への貢献

大久保は戦前に貴族院議員だったこともあり、旧知の国会議員の協力を得ることができ、この請願は同年11月30日に衆参両院の本会議で採択されました。翌昭和24（1949）年9月、国立国会図書館国会分館に憲政資料蒐集係（現憲政資料室）が設置され、憲政史の編纂事業は業務に含まれなかったものの、憲政資料の収集業務が正式に開始されます。大久保は国立国会図書館の嘱託（のちに非常勤調査員、客員調査員）となり、旧華族のネットワークを基に、伊藤博文、桂太郎といった

首相経験者をはじめ、明治以降の政治家・軍人などの資料の収集に努め、憲政資料室が近代私文書のアーカイブとして発展する素地を作りました。

「憲政史料だけでなく、幕末以降の政治・経済・外交史料で手に入るものは、すべて集めました」³との大久保の言葉どおり、関連領域の資料にも関心を寄せ、例えば、^{あまね}西周、^{まみち}津田真道といった幕末・明治初期の洋学受容に関わる人物の資料などを収集したことも特筆に値します。

大久保はこれ以外にも、昭和24年3月、96名の研究者による「史料館設置に関する請願」に名を連ね、これは昭和26（1951）年、主として近世の歴史資料を扱う文部省史料館（現国文学研究資料館）の設置につながりました。また大久保は、昭和33（1958）年、日本歴史学協会が日本学会会議に提出した「国立文書館建設の要望書」の作成に関わり、この要望書を受けた日本学会会議は翌年、当時の岸信介首相宛に「公文書散逸防止について」を勧告し、昭和46（1971）年、公文書アーカイブである国立公文書館発足に至りました。



左 近影(平成4年10月 大久保利謙氏提供) 右上 貴族院五十年史編纂会収集文書(昭和41(1966)年に参議院から移管)、
右下 大久保利謙旧蔵文書。いずれも東京本館憲政資料室蔵。

■歴史資料にみる大久保利謙の足跡

—その一例—

国立国会図書館の憲政資料室は、大久保の足跡を伝える資料として、大久保ら編纂関係者が筆写で収集した貴族院五十年史編纂に関する資料や、大久保が西周、津田真道、森有礼^{ありのり}の各全集を編纂する際に収集した文書などを所蔵しています。また、大久保家に遺された祖父利通に関する資料のほか、父利武が『大久保利通文書』(日本史籍協会 1927-1929)の編纂、刊行に関わった際に収集した写本、断簡類と大久保自身の旧蔵資料からなる「大久保利謙旧蔵文書」を所蔵しています⁴。

(主題情報部政治史料課 ^{ふじもと まさる} 藤本 守)

1 おもなものは『大久保利謙歴史著作集』全8巻(吉川弘文館 1986-1993)に収録されている。〈請求記号 GB415-87〉2007年に吉川弘文館から復刊された。

2 この請願は、衆議院事務総長、国立国会図書館長を務めた鈴木隆夫の旧蔵資料に含まれていたもので、平成4年に国立国会図書館へ寄贈された。請願の翻刻は、二宮三郎「憲政資料室前史(中)」『参考書誌研究』(44) 1994.8 pp.22-46 (<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/44-05.pdf>) 参照。

3 大久保利謙著『日本近代史学事始め 一歴史家の回想』(岩波新書 1996) p.160

4 「貴族院五十年史編纂会収集文書」「西周関係文書」「津田真道関係文書」「森有礼関係文書」「大久保利通関係文書」「大久保利謙旧蔵文書」は、東京本館憲政資料室で閲覧可能(一部はマイクロフィルムでの利用)。利用の際には、閲覧許可申請が必要。なお、資料の状態によっては利用できない場合がある。

大久保利謙(おおくぼ としあき)

1900年1月25日東京生まれ。大久保利通の孫、大久保利武の長男。1928年3月東京帝国大学文学部国史学科卒、同年4月東京帝国大学文学部副手(～1930年3月)。1928年5月東京帝国大学五十年史編纂嘱託(～1933年1月)、1934年5月日独文化協会嘱託(～1936年4月)、1938年5月帝国学士院嘱託、1938年11月貴族院五十年史編纂事務嘱託(～1943年9月)。1943年9月侯爵(襲爵)、貴族院議員。1949年9月国立国会図書館嘱託となり、その後非常勤調査員・客員調査員として1990年まで勤務。1953年3月名古屋大学教授(～1959年3月)、1959年4月立教大学教授(～1965年3月)。1993年、日本近代史学に対する多方面での貢献により、朝日賞を受賞。1995年12月31日没。95歳。

より深く知るために

- 大久保利謙、伊藤隆、土田直鎮「私の近代史研究」『日本歴史』(403) 1981.12 pp.70-86、(405) 1982.2 pp.64-88 〈請求記号 Z8-255〉
- 大久保利謙「憲政記念館と憲政資料室・国立公文書館 大正以降のわが国憲政史研究の回顧」『憲政記念館の二十年』衆議院憲政記念館 1992 pp.1-20
〈請求記号 A4-E3〉
- 「特集 憲政資料室の35年」『みずす』(276) 1983.8-9 pp.47-118 〈請求記号 Z21-66〉

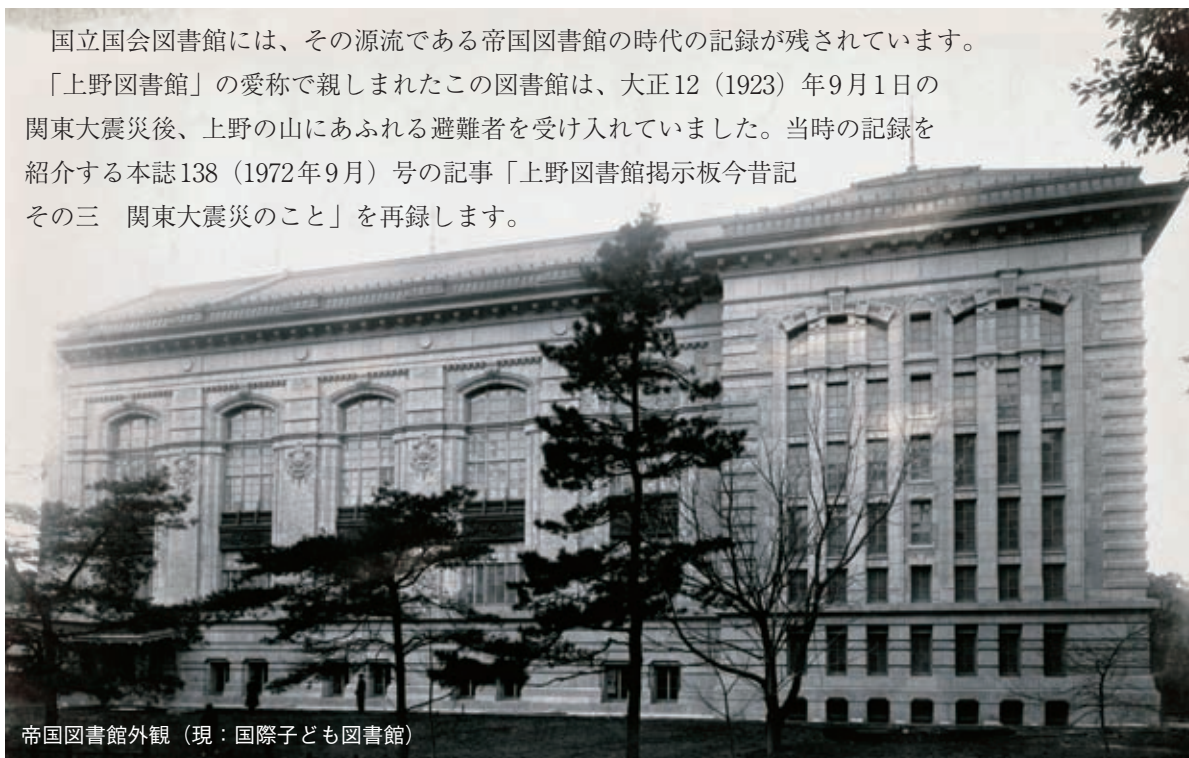
参考文献

- 大久保利謙『日本近代史学事始め 一歴史家の回想』(岩波新書) 岩波書店 1996 〈請求記号 GK114-G3〉
- 国立国会図書館主題情報部政治史料課「大久保利謙先生に聞く 近代政治史料収集のあゆみ」『参考書誌研究』(73) 2010.10 pp.1-28 (<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/73-06.pdf>) (74) 2011.3 pp.1-35 (<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/74-06.pdf>) *平成23年9月下旬掲載予定
- 二宮三郎「憲政資料室前史」『参考書誌研究』(43) 1993.9 pp.50-73 (<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/43-05.pdf>)、(44) 1994.8 pp.22-46 (<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/44-05.pdf>)、(45) 1995.10 pp.18-47 (<http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/45-05.pdf>)
- 堀内寛雄「日本国会史編纂所設置二関スル請願」(稀本あれこれ 342)『国立国会図書館月報』(419) 1996.2 〈請求記号 Z21-146〉 p.32

関東大震災と上野図書館

国立国会図書館には、その源流である帝国図書館の時代の記録が残されています。

「上野図書館」の愛称で親しまれたこの図書館は、大正12（1923）年9月1日の関東大震災後、上野の山にあふれる避難者を受け入れていました。当時の記録を紹介する本誌138（1972年9月）号の記事「上野図書館掲示板今昔記 その三 関東大震災のこと」を再録します。



帝国図書館外観（現：国際子ども図書館）

「閲覧室掲示其他閲覧室ニ関スル事項」と題する文書綴の中にこのような記録がある。

「来十月十一日ヨリ開館ス」

何の変哲もない予告掲示であるが大正12年9月28日という掲示日付の故に一つの歴史を物語る。舞台は「宿直日誌」に始まる。

九月一日 土

本日正午近ク未曾有ノ強震起リ人心動揺甚シ 暫クシテ火災所々ニ起リ夜ニ入リテ下町火ノ海ト化ス 避難者陸續トシテ山内ニ入り来リ光景物タシ 警戒ニ全カヲ尽ス 警報耳ヲ打チ周囲益混乱ヲ極ム 最大不安ノ内ニ夜ヲ徹ス

九月二日 曇

前日ニ引続キ山内ノ避難者混乱ヲ極メ当館玄関庭園内ニモ

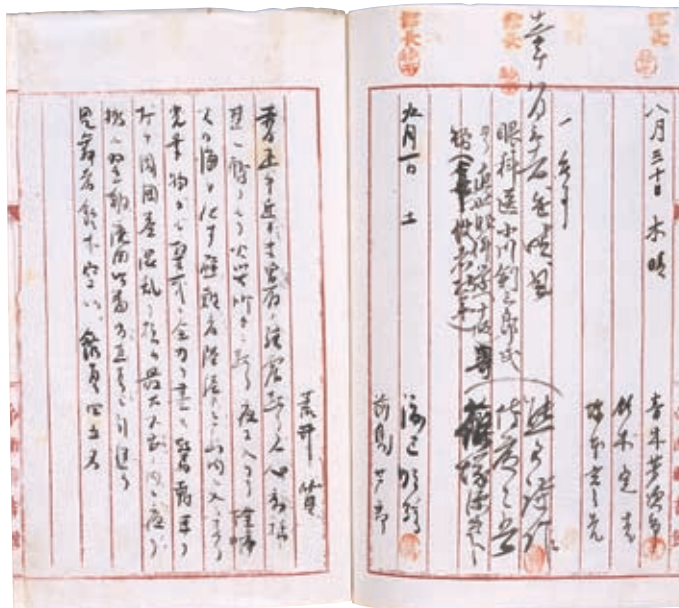
避難スル者愈々其数多キヲ加ヘタル為メ 其整理警戒等ニ全カヲ尽シタリ 市内ノ火災ハ益々拡レル模様ニテ上野停車場及其附近ノ焼尽サレル頃ニハ風ハ当館方面ニ吹キタル為メニ火ノ粉ハ熾ニ飛ビ来リ 甚ダ危険ノ状態トナリタル為メニ館長ノ命ヲ受ケ重要書類ヲ自宅ニ搬出シ専一警戒ニ勉メタリ

九月三日 曇 強雨アリ

午前三時頃ニ至リテ市内ノ火災漸ク下火ノ模様ナリ 避難者ノ混乱ハ前同様ノ有様ナルニヨリ館長ノ命ヲ受ケ東側木戸ヲ開放シテ避難者ヲ収容シ専ラ整理警戒ニ努力シタリ

この日、赤司鷹一郎文部次官より

「今回ノ罹災者ニ対シ貴館内ヲ便宜開放方警視總監ヘ通知相成タルニ付時宜ニ応シ同總監ト協議ノ上開放相成様致度」旨の指示あり、よって松本



宿直日誌 大正12年9月1日

喜一館長は、9月4日別館の開放を命じて避難者の収容を始めた。

九月五日 水 晴

大災後世間騒然トシテ本日モ戒厳令ヲ解カレズ本館夜間ノ警戒ヲ厳ニスバク特ニ館長ヨリノ命ニヨリ当直員ヲ増員シサービス 幸ニシテ無事

午後八時及午前三時ノ二回巡回ノ兵士ニ尋ネシ処附近一帯異状ナシ

午後五時頃内務省ヨリ避難者収容数調査ニ来ル 依テ左ノ如ク回答ス

- 一、館内収容現在数 七十名
- 一、柵内 〃 百五十名

九月六日 木 晴

本日館内避難者二十八名増加 別館二階へ収容ス

九月七日 金 晴

例ニ依リ本日午後三時ニ各員警戒ニ服務ス 世間稍々安堵ノ趣アルモ避難者ノ移動甚ダシ

本日ノ収容人員午後五時迄ニ二十名並ニ退館者十名

午後六時頃下谷警察署員ノ報告ニ依レバ上野竹之台美術協会ニ収容スル避難者中ヨリ赤痢患者並ニチブス患者発生セシ為メ健全者ノ隔離ヲ要スルトノ事 之レガ収容方ヲ本館ニ請願 該人員大約六十名 之レガ要スル時間午後十一時迄 餘ハ翌日午前五時迄半夜交代ニテ館ノ内外ヲ警戒ニ努ム

九月十一日 火 晴

電灯ハ昨夜ヨリ点火ス

九月十五日 土 風雨強シ

朝来ノ風雨ハ夜ニ入りテ益々激甚ノ度ヲ加ヘ深更ニナルニ及ンデ一層猛威ヲ逞ウシ人心ヲシテ無限ノ不安ニ導ク 警戒員一同異常ノ緊張ト不断ノ注意ヲ以テ万違算ナキヲ期シ巡検ニ従事ス 幸ニ事故ナキヲ得タリ

九月十六日 日 風強シ晴

文部大臣官房建築課伊賀原太七氏外三名来館 本館ノ震害程度ヲ巡観セラル

漸く小康を得てか9月18日、再び本省からの文書に接した。

「学校内ニ収容中ナル一般避難者措置ニ関シテハ追々授業開始ノ関係モ有之目下建設中ノ公設バラックニ至急収容方震災救護局、東京府及東京市ニ交渉シ夫々諒解ヲ得タルニ付貴職ヨリ最寄ノバラック

建設事務所ニ直接御交渉相成度御参考申進候」

この指示に基づき館長は、下谷区長に現在の45家族172名の「バラック」収容方を申入れた。その回答文書は見当たらないが、恐らくは緊急の折から口頭で具体的打ち合わせがなされ、その見通しがついたので、震害補修の手間も見込んで冒頭28日付の開館予告掲示となったものと推察される。「宿直日誌」に戻る。

拾月七日 曇少雨 日

避難者一同竹之台（い号）バラックニ収容転居セラレタリ 約一ヶ月ノ馴染ニ涙ヲ浮ベテ館ヲ去ル人モアリタリ

その涙を示すものとして、ここに同日付避難者34世帯152名連署の感謝状がある。

「拝啓 秋冷相催し候処職員御一統愈々御健勝に被為渉候段奉大賀候

偕て今度の大震災は未曾有の悲惨事にして死者幾十万なるを知らされ申候に付ては吾等一同無事なるを得たるも衣なく食なく住むに家なく困厄の折柄貴館御一統の深き御同情に依り館内に御収容被下雨露を凌ぐを得たるのみか 職員御一統寢食を忘れての御配慮により職に離れたる吾等一同何等衣食にも窮することなく日を関する事一月其間一人の急疫をも発することなく今日あるを得たるは只管御一統様御尽力の賜と深く奉鳴謝候

然るに此度御配慮により竹の台バラックに収容さるることと相成 貴館を去るに臨みて御一統様

に対する思慕の念禁ずる能はず 爰に謹んで御礼申述度如斯御座候 敬具」

かくて再開の日は来た。宿直日誌は語る。

十月十一日 木 晴夜雨

特筆スベキ事ナシ

追って帝国図書館大正12年度年報は、

「閲覧人ノ数ハ前年度ニ比シ一万六千五百二十六人ヲ減セリ 之本年度ハ九月大震災ノ為メ館内ニ避難者ヲ収容 館員ハ之ガ救済ニ努ムルト共ニ傍ヲ破損箇所ノ修理及書庫整理等ノ為メ閉館一ヶ月以上ニ涉リタルニ由ルモノニシテ之ヲ一日平均ニ徴スレバ却テ前年度ヨリ三十七人強ヲ増加セリ」

「震災後諸官庁調査員激增セル為メ館員ノ食堂ヲ廃シテ右調査室ニ充当シテ其便ヲ計ルコトセリ」と述べ、さらに、震災時の図書焼失冊数を、和漢書236部311冊、洋書58部96冊と報じている。仲従士町櫻井製本所にあったものおよび特許帯出中の図書で、いずれも館外の被災であった。

（支部上野図書館長（当時） ^{にしむら}西村 ^{まさもり}正守

編集 総務部総務課）



言葉のエッセイ

第8回 外国語を日本語でどう表記するか

外国語は、日本語と音韻体系が違うので、忠実に表記しようとしてもできないのは当たり前のことである。第4回で、地名について「原音に近いのが望ましいとはいえ、多くの人がそう呼ぶものに従うのがよい」という見解を示したが、他の基準としてはどのようなものが考えられるだろうか。

一つは、原音に一番近い表記をするという基準が考えられる。この基準に従い、かの有名な社会学者マックス・ウェーバーを「ヴェーバー」と表記している例はたくさん見られる。しかし、実際そう発音している人はあまり見かけない。また、この基準を通すと、「バレーボール」は「ヴァリボール」としなければならない。「ヴァ」なんて音は日本語にはないから「バ」にしましょうというのもわかるが、だからといって「ウェーバー」を「ペーバー」にすると、今度はいくつ誰のことかわからなくなる。



ヴァリボールプレイヤー

ドイツ語の「r」は、なかなか問題のある音で、地方によって発音に差があるが、少なくとも標準語では、基本的にのどびこを鳴らす。これは、日本語にない音である。日本語で表記する場合には、あえて近い音ということで「ル」を当てている。しかし、母音の後ろに来ると「ア」に近い音になる。「山」を意味する「Berg」は、普通ドイツ人は、「ベアク」と発音しているが、日本語ではほとんど例外なく「ベルク」と表記されている。

このように、同じ文字でも読み方がいろいろ

あると困る。スウェーデン語の「ge」は、「イエ」と発音するときと「ゲ」と発音するときがあって難しい。そういう使い分けの面倒を避けるため、同じ文字はなるべく同じように読むという基準をとるとなると、有名なドイツの詩人シラー（Schiller）を「シルレル」と書いていた昔の表記もあながち否定できなくなる。「r」とは関係ないが、これまた有名な詩人「Goethe」は、「ギョオテ」などさまざまな試行錯誤を経て「ゲーテ」に落ち着いた。これなどは、「グーテ」と言ったほうが、ドイツ人に通じるかもしれない。

このように、いろいろ考えていくと、よくわからなくなるので、前にも述べたとおり、原音に近いのが望ましくはあるが、多くの人が使っている表記法に従うのがよいというのが妥当な線ではなかろうか。

しかし、前例があまりなくて、従うべき手本がない場合はどうだろう。第4回で、オランダ語の「Duits」に「ドイツ」という仮名を当てたが、筆者の耳で聞く範囲では、「ドイツ」とも書けるような気がする。あまりオランダ語の「ui」を日本語にしている例を見たことがないので、何ともしがたいところである。また、ポーランド語の「wie」の音は、1音節なので、あえて仮名を当てると「ヴィエ」とでもなろうが、「イエ」などと小さい文字を2つも続けていいものだろうか。これも悩みどころである。

（ゴガク・マニアシュヴィリ）

館内サービスが変わります

平成24年1月、国立国会図書館の東京本館、関西館、国際子ども図書館で、館内サービスの利用方法が変わります。便利になる点、ご注意いただきたい点をご紹介します。



国立国会図書館は蔵書の大部分を書庫に収蔵しており、利用する際には目録を検索し、閲覧を申し込みます。来館すると、まずは館内利用カードを入口のカード発行機で作成し、そのカードを使って蔵書目録の検索等を行います。関西館では平成14年の開館当初から、東京本館では平成16年から、このようなコンピュータシステムを活用した館内サービスを開始しました。

一方、情報のデジタル化が急速に進み、デジタル化した蔵書、電子ジャーナル、各種データベースなど、館内で利用できるデジタル・コンテンツも多種多様になっています。

平成24年1月、新しいシステムの導入と同時に、

東京本館、関西館、国際子ども図書館の館内サービスの利用方法が変わります。

1枚のカードからすべてのサービスへ

平成24年1月以降は、登録された方に登録利用者カード（ICカード）をお渡しします。この1枚のカードで入館ゲートをお通りいただけるようになります。退館の際も、そのままお持ち帰りいただけます。

平成24年1月以降、書庫内に保管されている蔵書を利用する際は、この登録利用者カードが必要となります。閲覧を申し込んだ本等の到着状況の確認、複写製品の受取りなどにもこのカードを使

います。

なお、登録しないで入館される場合は、従来より簡単な手続きで当日利用者カードを発行します。このカードでは、書庫内の蔵書を利用できませんが、それ以外のほとんどのサービスはご利用いただけます。

1 台の端末からすべての資料へ

現在の館内の端末は、蔵書の検索や閲覧の申込み、電子情報の閲覧、複写申込みなど、目的によって使い分ける必要がありますが、平成24年1月からは、基本的に館内のどの端末でも検索、申込み、電子情報の閲覧ができるようになります。

■ デジタル・コンテンツの拡大

利用者端末の機能の統合が必要となる最大の理由は、館内で提供するデジタル・コンテンツの拡大です。端末の機能を統合することにより、平成24年1月からは、館内に閲覧機能をもった端末を増やします。

国立国会図書館は、利用による原本の劣化を避けるため、蔵書のデジタル化を積極的に進めてい

ます。平成23年8月現在、デジタル化は下表のとおり非常に大規模に進行していますが、著作権保護のため、デジタル化した蔵書のかなりの部分は、館内のみで提供しています。なお、デジタル化した図書や雑誌などの原本は、原則として利用できません。

種別	インターネットでの提供	館内限定の提供
図書	23.5万冊 (23.5万冊)	43.9万冊 (55万冊)
雑誌	—	31.9万冊 (76.7万冊)
古典籍	1.3万点 (6.4万点)	300点 (2.2万点)
歴史的音源	500点 (500点)	2万点 (2.8万点)

デジタル化した蔵書数（平成23年8月末現在）

*（ ）内は平成24年1月の提供予定

館内では、デジタル化した蔵書以外に、電子ジャーナル、外部データベース、歴史的音源¹、インターネット資料²等を提供しています。これらも同様に、1台の端末から利用できるようになります。また、調査研究に必要な範囲内で、インターネットもご利用いただけます。

■ 使いやすい端末へ

このように、端末によるサービスが拡大するため、台数の増設が必要となります。また、デジタル化した蔵書の閲覧に適したサイズのディスプレ

登録するには

サービスの変更直後は、登録手続きに時間がかかることが予想されます。登録がお済みでない方は、お早めのご登録をおすすめします。すでに登録されている方は、平成24年1月以降、来館時に従来のカードをお持ちくだされば、新しいカードと交換します。

登録の手続きについては、館内でご案内するほか、ホームページ「登録利用者制度のご案内」(<http://www.ndl.go.jp/jp/information/guide.html>)に掲載しています。なお、手続きの方法は平成24年1月以降変更する場合があります。



東京本館 本館目録ホール
かつてはカード目録が林立していたが(上)、平成16年10月にOPAC端末が入った(下)。平成24年1月には新しい端末が並ぶ。



いを導入します。東京本館においては、平成23年7月に従来よりも一回り大きいディスプレイを備えた端末を本館目録ホールに40台増設しました。平成24年1月には従来の端末をすべて入れ替え、全体で500台を上回る規模となる予定です。

1回の検索からすべての情報へ

国立国会図書館の多くの蔵書を利用するには、目録を検索する必要があります。平成24年1月からは、館内の端末で、国立国会図書館のみならず、外部の機関等が提供する目録やデジタル・コンテンツなど、幅広い情報を検索することができます。

■新たな検索手段「国立国会図書館サーチ」

「国立国会図書館サーチ」は、国立国会図書館を含む図書館、公文書館、美術館・博物館、学術

研究機関の目録データベースやデジタル・コンテンツをまとめて検索することを目指したサービスです³。平成24年1月からは、館内サービスにおいてもこの「国立国会図書館サーチ」が検索の窓口になります。総合的な情報検索機能に加え、書庫内の蔵書の閲覧申込み、館内限定で利用できるデジタル化した蔵書や電子ジャーナル等の検索・閲覧などの館内サービスをわかりやすくご案内できるよう、館内向けのインターフェースを備えます。

■利用案内の改編

「国立国会図書館サーチ」は館外の膨大な情報を検索の対象とし、多様な機能を備えているため、どのような使い方をすればよいのか迷う場合があるかもしれません。このため、端末画面上でのナビゲーションやインターフェースをわかりやすいものとするよう工夫するほか、現在の「総合案内」カウンターでのご案内や、利用方法をご説明するガイダンス⁴を再編し、よりわかりやすいご案内



館内端末の画面（イメージ）

ができるよう検討しています。

また、大画面の利用案内用端末（インフォメーション・ボード）を随所に設置し、利用案内の画像等を放映するほか、必要に応じて選択できるメニューを提供します。

よりよい利用環境へ

このほか、平成24年1月には、次のような利用環境の改善を目指します。

■プリントアウトカウンターの増設

デジタル化した蔵書等の利用が増えることで、それらのプリントアウトも格段の増加が見込まれます。東京本館では、本館にプリントアウトカウンターを新設します（現在は新館のみ）。

■インターネット利用環境（無線LAN）の導入

ご自分のPCを持ち込んでインターネットを利用できるよう、無線LANの環境を整備します。従来からご要望をいただいております。一部のエリアから整備を開始して、徐々に整備していく予定です。

■快適な利用環境のために

館内端末や持ち込みのPCの利用が増加することで、キーボードを操作する音なども増すことになります。このため、機器類を利用できるスペースとそれらを利用しないスペースを可能なかぎり

区分し、静かな環境を確保するよう努めます。

これまでご説明した館内サービスの計画は、平成24年1月の実現を予定していますが、図書館サービスの変貌が加速化する中では、この変更はひとつの通過点でしかありません。国立国会図書館は、平成23年10月に利用者サービス部門の統合・合理化や電子情報部門の拡充など、さらに将来を見据えた組織面での再編も行う予定です。館内サービスについても、この新しい体制のもとで改善を続けていく所存です。

なお、サービス変更と同時にシステムの更新を行います。新システムの導入にあたり、一部のサービスの休止等を予定しています。今回のサービスの変更や休止等の詳細については、今後、本誌やホームページ等で順次お知らせします。ご理解、ご協力をお願いいたします。

（資料提供部利用者サービス企画課）

1 20世紀前半に国内で製造されたレコード（SP盤等）をデジタル化したもの。詳しくは、本誌pp.4-9「SP盤のデジタル化」「歴史的音源の提供」参照。

2 過去のウェブサイトを国立国会図書館が収集・保存したもの。

3 詳しくは、本誌604/605（2011年7/8月）号 pp.18-21「新しい統合検索サービス 国立国会図書館サーチ」参照。

4 東京本館、関西館では、館内サービスの利用方法、調べ物の方法について定期的にガイダンスを行っている。詳細は、ホームページ「イベント・展示会情報」（<http://www.ndl.go.jp/jp/event/index.html>）参照。

本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

「ムカサリ絵馬」展

描かれた死者の結婚式

小田島建己、志賀祐紀、毛利夏子編「ムカサリ絵馬」展実行委員会刊
2010.9 56頁 30cm <請求記号 GD33-J243>

本書は、2010年9月25日から10月2日にかけて東北大学附属図書館において行われた「ムカサリ絵馬」展の図録である。

「ムカサリ」とは山形の方言で「結婚(式)」や「花嫁」を意味し、ムカサリ絵馬とは、独身で亡くなった者、特に夭折した死者の供養として、故人の結婚式の様子を絵馬に描いたものである。このムカサリ絵馬を寺院に奉納する習俗は、山形県の山形盆地を中心とした村山地方で明治後期から現在に至るまで続けられている。ムカサリ絵馬が奉納されている寺院では、寺院の壁や堂などに所狭しとこの絵馬が並べられているのを見ることができる。

今回の「ムカサリ絵馬」展は、山形県内の8つの寺院と山形県立博物館から総計86点のムカサリ絵馬を借用し展示したものである。本来、展示物ではないムカサリ絵馬を一堂に見ることができる例のない展示で、1週間という短い展示期間であったが、会期中、東北大学で日本民俗学会第62回年会が開催されたこともあり、全国の研究者が訪れた。

本書に掲載されているムカサリ絵馬を見ると、結婚式という本来明るい場面がどれも悲しみを帯びた独特の雰囲気で描かれていることに、まず圧倒される。そして本書でも指摘されているが、時代とともに、描かれる結婚式の様子に変化してくる点にも気付かされる。

古いものは、三三九度の様子を描き、新郎新婦の間に雄蝶雌蝶おちょうめちょうと呼ばれる酌をする子どもや仲人・両親などを配して描かれるのに対し、昭和中期以降は新郎と新婦が直接並んで描かれる構図が現れ、

新郎新婦のみを記念写真のように並べて描いた構図も現れるようになる。昭和58年や平成19年に奉納された絵馬は、タキシードにウエディングドレスという洋装の姿の新郎新婦が描かれている。ムカサリ絵馬は架空の結婚式を描いたものではあるが、家どうしの結婚式から当人どうしを祝う結婚式という、結婚観の変遷もうかがえる。

本書には、村山民俗学会(山形県)を中心とした調査記録や研究者による論文も収められている。なかでも「「死者」と「結婚式」(小田島建己)」と「現在進行形のムカサリ絵馬」(小嶋独観)は、ムカサリ絵馬がなぜ奉納されるのかという点に触れられていて興味深い。小田島の「(ムカサリ絵馬は)結婚式に臨み慰められている死者の姿であると同時に、慰められている死者を観る奉納者自身の慰めでもある」という指摘は、ムカサリ絵馬奉納の理由であるとともに、ムカサリ絵馬の持つ独特な雰囲気の理由ともなる。

(総務部情報システム課 吉村 風)



窓と扉

窓と扉の向こうにある平和と幸福のために

富田俊彦、平井良法著 都市防犯研究センター編・刊
2010.1 102頁 30 cm <請求記号 NA232-J18>

本書は二部からなり、前半は窓と扉の現在、後半は窓と扉の歴史について述べている。

前半の冒頭では、空き巣などの犯罪手口とその対策が述べられる。日本では、「水と安全はただ」といわれ、治安が良好だったことも災いして、窓や扉の防犯性能は、諸外国に比べて格段に劣るようである。国土交通省、経済産業省と建物部品関連の民間5団体からなる官民合同会議では、防犯性能の高い建物部品（ドア、サッシ、ガラス、シャッターなど）にCP（Crime Prevention）マークを付け、その普及に努めている。防犯性能の高い建物部品の設置による防犯対策の必要性、これが本書の主旨といつてよい。だが、本書が独特なのはここからである。

防犯対策の必要性に関する記述のあと、本書は、にわかに百科事典的な様相を呈してくる。様々な角度から、窓と扉に関する知識が列挙される。窓とガラス・格子、ドアと引戸、シャッター、ウィンドウ・フィルムのそれぞれについて、その種類、基本構造、各部の名称、外国の事例などが説明される。窓と扉にまつわるおもな用語解説や、世界の16の言語による「窓」と「扉」の呼び名も載っている。ヨーロッパに多い内開きのドアと日本に多い外開きのドアの優劣を対比した表もある。防御面では内開きが優れているが、外開きは靴脱ぎのスペースが確保されるなど日本の風習に合うという利点がある。

さらに圧巻は、本書の半分を占める、窓と扉の歴史である。日本、中国、ヨーロッパなどでの発展の歴史が紹介される。英語のwindowはwind + ow、つまり「風の目」に原意があるとされること。最古の

ガラス窓の例はヴェスヴィオ火山の噴火により一夜にして灰の下に埋もれたといわれるポンペイに見られること。島原の乱の引き金となった藩主松倉氏の圧政ぶりの一つに窓への課税があったこと。このようなエピソードに目を通すうちに、窓と扉をめぐる様々な物語——ハインライン「夏への扉」、サキ「あけたままの窓」、グリム童話「マリアの子ども」、谷川俊太郎作、安野光雅絵「あけるな」などが思い浮かんだ。窓と扉について思いをめぐらせることによって、その役割や重要性を再認識させ、読者の防犯意識を高める狙いがあるのかもしれない。ただ、百科事典的知識や歴史について、防犯対策につながるような観点からの分析がないことは残念である。

本書は、『鍵と錠 鍵穴の向こうにある平和と幸福のために』（都市防犯研究センター 2009）の続編である。前書に続き、日常的なものを様々な角度から改めて考察した本書は、防犯対策以外にも、思わぬ副産物をもたらした。見慣れた窓と扉がまた違って見えるのである。

（総務部総務課 井田 敦彦^{いだ あつひこ}）

※財団法人都市防犯研究センターは、平成22年3月31日に廃止された。



第9回納本制度審議会 代償金部会

7月29日、東京本館において、第9回納本制度審議会代償金部会が開催された。部会所属委員5名のほか、国立国会図書館からは収集書誌部長等10名が出席した。

6月28日の第20回納本制度審議会において同部会へ付託された諮問について、前回に引き続き調査審議を行い、答申「国立国会図書館法第二十五条の規定により納入する出版物の代償金額に関する件（昭和50年国立国会図書館告示第1号）第2項第2号に規定する納入の一括代行事務に要する金額の見直しについて」が議決され、国立国会図書館長に提出された。

答申の本文は、国立国会図書館ホームページ＞納本制度＞納本制度審議会 (http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/deposit_council_book.html) に掲載している。

ハーバード大学 エドウィン・O・ライシャワー 日本研究所との 東日本大震災に関する デジタルアーカイブ 共同事業協定

8月29日、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所と東日本大震災に関するデジタルアーカイブ共同事業を行うこととして、協定を締結した。

国立国会図書館は、法律に基づいて国等の公的機関のウェブサイトを収集しており、東日本大震災後は、被災地の自治体等のウェブサイトの重点的な収集に努めている。同研究所は、東日本大震災に関するデジタル情報を可能な限り収集・保存し、学問的に研究・分析できるよう、平成23年3月下旬に「2011年東日本大震災デジタルアーカイブ」プロジェクトに着手し、国立国会図書館は、プロジェクト開始直後から、被災地のウェブサイトの収集状況を報告する等の協力を行っている。このたびの協定の締結により、協力関係を公式に位置づけ、世界規模での東日本大震災に関するデジタルアーカイブを構築するため、より一層緊密な連携・協力を行っていく。

おもな人事

＜異動＞

※（ ）内は前職

平成23年9月1日付け

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室付

(総務部長)

田屋 裕之

総務部長 (収集書誌部長)

網野 光明

収集書誌部長 (主幹 調査及び立法考査局総合調査室付)

金箱 秀俊

お知らせ

■ 国際子ども図書館展示会 「ヴィクトリア朝の子どもの本 イングラムコレクションより」



Tom Brown's school-days
(トム・ブラウンの学校生活)
by an old boy (Thomas Hughes)
; with illustrations by Edmund J. Sullivan.
London : Macmillan and Co., 1896.



The nursery "Alice,"
(不思議の国のアリス)
by Lewis Carroll
New York : Dover Publications,
1966.

国際子ども図書館は、10月5日から12月25日まで「ヴィクトリア朝の子どもの本：イングラムコレクションより」と題する展示会を開催します。19世紀のイギリスで生まれた児童文学や絵本の代表的な作品約60点により、近代イギリス児童文学の成立過程をたどります。

イングラムコレクションは、イギリスのヘレフォード大聖堂主教座名誉参事会員ウィニングトン＝イングラム師が、ヴィクトリア朝の道徳的、精神的価値観に沿った18世紀から20世紀の児童文学書を収集したものです。英国児童文学草創期を代表する18世紀の出版人ジョン・ニューベリーの出版物をはじめ、19世紀の少女小説などの日常生活物語やフェアリーテール、19世紀後半以降に隆盛期を迎えるファンタジー文学や冒険小説など、主にイギリスで出版された児童書など1,157冊からなる、国際子ども図書館の特別コレクションです。

ヴィクトリア朝を彩った子どもの本の魅力をお楽しみください。皆様のご来場をお待ちしています。

開催期間	10月5日（水）～12月25日（日）
休館日	月曜日、国民の祝日・休日、資料整理休館日（第3水曜日） ※10月8日（土）午後、11月8日（火）終日、12月3日（土） 午後は、イベント開催のため展示会をご覧いただけません。
開催時間	9:30～17:00
会場	国際子ども図書館 ホール（3階）
入場	無料

○お問い合わせ先

国立国会図書館 国際子ども図書館 企画協力課
電話 03（3827）2053（代表）

お知らせ

■『国立国会図書館 資料デジタル化の手引 2011年版』を 刊行しました



『国立国会図書館資料デジタル化の手引 2011年版』を刊行しました。この手引は、国立国会図書館の蔵書を画像としてデジタル化する際に、データ品質を確保するとともに作業の効率化を図るため、デジタル化の仕様や技術、プロジェクト管理上の留意点についてまとめたものです。平成17年3月に初版を刊行しており、今回は、平成21年度以降の大規模デジタル化作業の実績、国内外の技術の変化や進歩をふまえて改訂しました。

図書館等で所蔵資料のデジタル化を行う際にご参照ください。ホームページ上で全文をご覧になれます。

○国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >

国立国会図書館について>電子図書館事業の概要

>国立国会図書館資料デジタル化の手引

URL <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/digitalguide.html>

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 727号 A4 105頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・EU指令と我が国の運転免許制度
- ・農法的視点からみた水田農業再構築の課題
- ・地方における課税自主権の拡大に伴う経済的効果
- ・消費者庁の発足と課題
- ・英国の内閣委員会制度（資料）

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03 (3523) 0812

C O N T E N T S

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Bujun Toshokampo
 a library in a coal-mining town
- 04 Handing down the history of music
 04 Digitizing 78-rpm records : for use and preservation / So Fujimoto
 07 Providing historical recordings
 10 Musical materials in the NDL
- 17 Toshiaki Okubo : an essay
- 20 Great Kanto earthquake of 1923 and the Ueno Library
- 23 Essay on languages (8) Japanese spelling of foreign words
- 24 On-site user services will be renewed
- 16 <Tidbits of information on NDL>
 What's in a name? : new names for new sections
- 28 <Books not commercially available>
 ○*"Mukasari Ema" ten : egakareta shisha no kekkonshiki*
 ○*Mado to tobira : mado to tobira no muko ni aru heiwa to kofuku no tameni*
- 30 <NDL News>
 ○9th meeting of the Legal Deposit System Council Compensation Division
 ○Cooperative agreement for the digital archive of the Great East Japan Earthquake between the NDL and the Edwin O. Reischauer Institute of Japanese Studies at Harvard University
 ○Changes in personnel
- 31 <Announcements>
 ○Exhibition at the International Library of Children's Literature "Children's Books in the Victorian Era: from the Winnington-Ingram Collection"
 ○*Guidelines for digitization of materials 2011* published
 ○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成 23 年 9 月号 (No.606)

平成 23 年 9 月 20 日発行 定価 525 円
(本体 500 円)

発行所 国立国会図書館
 編集者 山田 敏之
 〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1
 電話 03 (3581) 2331 (代表)
 F A X 03 (3597) 5617
 E-mail geppo@ndl.go.jp

発売 社団法人日本図書館協会
 〒104-0033 東京都中央区新川 1-11-14
 電話 03 (3523) 0812 (販売)
 F A X 03 (3523) 0842
 E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社 正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 「刊行物」 > 「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



『おどりの図』から こきりこおとり（小切子踊）
〔江戸時代初期〕写 1軸 縦23.5cm
<請求記号 WA31-9>

国立国会図書館月報

平成23年9月20日発行（毎月1回20日発行）
（9月号通巻606号）

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525 円（本体 500 円）
